

IKUYO NAKAMA

ARCHITECT / ASSOCIATES

反転する豊かさの中で— 沖縄で建築をつくるということ

仲間郁代

1971 年沖縄県金武町生まれ。琉球大学工学部建設工学科卒業後
1997 年よりアトリエ門口（現：有限会社アトリエ・門口）に勤務。
2002 年仲間郁代建築設計事務所を開設。
2015 年仲間郁代建築設計事務所株式会社 設立

■ 幼年時代の原風景

私が生まれた1971年の沖縄は、まだアメリカ統治下がありました。母子手帳は琉球政府発行。翌年、日本へ返還されたものの、支払いはドル、道路は左ハンドル用車線と、生活の中には色濃くアメリカの気配が残っていました。

住んでいたのは、祖父が友人たちと建てた木造セメント瓦の小さな住宅群でした。広い敷地に数棟が点在し、親戚たちと集まって暮らしていました。今振り返れば、とても豊かな住まいだったと思います。祖父のつくった住宅は、夏は暑く、冬は寒い。台風が来れば、近くのRC造の建物へ避難してやり過ごすような暮らしでした。一方で、フェンスの向こう側に広がる米軍基地内の青い芝生、整然と並ぶ遊具、白いCB造の米兵用住宅は、私たちにとって“豊かさ”の象徴として、強く心に刻まれていました。

やがて日本は急速に発展し、フェンスの内と外での「豊かさ」は、反転していききました。かつて憧れた風景と、日常の風景。その頃の記憶は、今も私の中に残っています。

■ 内と外の価値感覚のズレ

私は建築を志すようになりました。

県内の国立大学で建築を学び、その後、県内の設計事務所へ就職しました。当時の建築業界は、シックハウス問題が大きく取り上げられ、デザインと機能の対立が強く意識されていた時代でした。コンクリート打放しの住宅は「住宅ではない」とさえ言われる風潮もありました。

大学ではバナキュラー性の強いコンクリート建築を学び、社会に出てからは、洗練されたコンクリート住宅を手がける建築に強く惹かれていきました。紀建設、アトリエ門口、ND企画設計といった存在は、映画のワンシーンのような住宅、夢のような建築を生み出す、当時の私にとっての憧れでした。その中でも特に、まだ所長一人で活動されていたアトリエ門口の仕事に深く共鳴しており、就職する機会を得ました。職人との協働、そして建築が社会に貢献し得る仕事であること。仕事と建築の本質。その多くをこの場所で学び、今でも深く感謝しています。

当時、県外の大手建築雑誌から所長の建築を掲載したいという依頼がありました。しかし掲載後、「これは沖縄の建築ではない」という批判が誌面上でなされました。その出来事を通して、沖縄に住む人々が望む建築と、県外の人々が沖縄に求める建築。その間にある大きな乖離を、私は強く意識するようになります。

所長たちのスタイルが主流になってゆく中で、沖縄では、洗練されたコンクリート建築が「脱毛建築」（沖縄人は毛深いから）と呼ばれ、ひとつのカテゴリーとして広く認識されるようになりました。そこにもまた、外からの価値と内側の感覚とのズレが表れていたように思います。

■ 沖縄らしさとは何だろうか

30歳で独立して以降は、当初は女性という立場から、家事動線や介護動線、収



納計画といった、日常に根ざした機能性が強く求められ、仕事をいただけてきました。また、明るく風通しのよい住環境や、居住性の高さも重要な要望でした。一件一件に丁寧に向き合いながら、建築主の潜在的な希望や、言葉にならないこだわりをすくい取り、それに応える設計を積み重ねてきました。

そうした経験を重ねる中で、蓄積された私自身の思想や空間に対する考え方に共感していただけるようになり、現在では、機能を満たすだけでなく、空間の質やあり方そのものに価値を見出して依頼をいただく機会が増えています。

予算をかけずに快適性を確保するために、沖縄の古民家の配置や間取りを踏襲すること。また、老いても住み続けられるよう、バリアフリーに近い空間構成とすること。これらは、これまでの経験から導かれてきた私の設計の前提でもあります。

田の字型の構成を基盤としながらも、建築主の個性と生活動線を重ね、光や風、気配の移ろいを静かに受け止める。造形のインパクトや視覚的な強さが前面にでる建築ではありませんが、時間とともに質を増していく、静かな空間でありたいと考えています。そうした設計を、私のひとつのスタイルとして大切にしています。

近年では、沖縄らしい空間として、洞窟のように一筋の光を際立たせる暗い住宅や、すべてが荒々しいコンクリートの塊でつくる住宅も、住まいとして強い批判を受けることなく普通に建つようになりました。建築デザインの選択肢が広がる一方で、価格の高騰や経済性の問題から、安価な県外資本のハウスメーカーの木造住宅しか選べない状況も広がっています。

純粋文化は減びると言われますが、外から見た沖縄らしさと、県民が感じる沖縄らしさ。その間にある揺らぎを抱えながら、沖縄の風土や記憶に根ざした空間のあり方を、現代の暮らしの中でどのように更新し、次の世代へとつないでいくことができるのか。

フェンスの内と外。原風景の価値が反転していく中で生まれた、「豊かさとは何か」という問い。そして、沖縄らしさという概念そのものが、果たして何を意味するのか、必要なのかという問い。その問いに向き合いながら、建築に取り組んでいます。



YAGAJI STAY

Hospitality/Cultural Architecture, 2024

原風景を継承し、文化を未来へ手渡す建築

計画地は、樹齢百年を超えるフクギの木々に包まれた土地。そこには、築およそ百三十年の沖縄伝統古民家が、長い時間を静かに刻みながら佇んでいた。再生の可能性を慎重に探ったが、経年劣化は想像以上に進み、建て替えという判断に至った。しかしそれは、風景を更新することではなく、佇まいと記憶を、次の時代へ受け渡すための建て替えでもあった。

建築主である企業が望んだのは、単なる保養施設や宿泊機能にとどまらず、沖縄の原風景と文化を静かに伝え、次世代へと手渡していく「開かれた民家建築」。この場所が、土地の記憶を宿したまま、新しい役割を担うことが求められた。沖縄伝統古民家の象徴である、深い庇(雨端)と開放的な開口部。それらは本来、風と影を受け止め、自然とともに暮らすための知恵であるが、同時に、現行の木造構造規定においては、耐力壁の不足や台風時の吹き上げに対して大きな課題を抱えている。本計画では、構造解析を行った上で、在来の伝統木組み(仕口・継手)を基本としながら、鉄骨の筋交いや梁を部分的に補強材として組み合わせる構造で解決した。伝統を形としてなぞ



るのではなく、思想を継承し、構造として更新するための選択である。

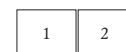
平面構成は、沖縄古民家における「表座・裏座」の関係性を踏襲。湿気対策を要する水回りはRCボックスに包み、表座と裏座の間に配置することで、木造

空間の呼吸を妨げない構成としている。また、浸水災害への備えとして、基礎は石場建てではなく、高床までをRC造とした。当初予定していたセメント瓦や、焼杉板型枠の再利用は、設計期間中に重なったコロナ禍により、やむなく変更を余儀なくされた。県内最後のセメント瓦職人の引退、外壁材の保管環境の問題。それらは、失われつつある技術と時間の重さを、改めて私たちに突きつける出来事でもあった。

古井戸から引き込んだ水を湛える水盤は、ビオトープとしてこの土地に再び循環をもたらし、フクギの大樹、深い雨端、開放的な開口部とともに、新しい木造民家の風景を静かにかたちづくっている。悠久の歴史に想いを馳せながら、人が集い、語らい、文化が行き交う場として。原風景を守りながら、未来へとひらかれていく建築をめざした。



1. 裏座の寢室。集落の風景を望む
2. 補強された架構による大空間
3. フクギの時間に寄り添い、建築を据える
4. 井戸水を湛えるビオトープの前庭
5. 深い庇のもとに広がる半戸外空間



所在地: 沖縄県名護市
建築主: 企業
構造・規模: 混構造 平屋
敷地面積: 980.33㎡
建築面積: 140.80㎡
延床面積: 130.88㎡
撮影: 安里尚之



Ak house

Residential Architecture, 2020

ゲニウス・ロキ。文化を映し更新する住まい

「ゲニウス・ロキ(genius loci)」とは、ラテン語の genius (守護霊)と loci (土地・場所)を合わせた言葉で、その土地に固有の霊性——「地霊」を意味する。18世紀のイギリスで生まれた思想で、土地や場所に宿る力に逆らうことなく、その声に耳を澄ませながら建築や地域を形づくるという考え方である。

計画地は、沖縄本島南部の新興住宅地。事業家であるオーナーとそのご家族は、ビジネスでの接客や、子どもたちの海外交換留学生の受け入れなど、住まいを「家族の器」ととどまらず、人を迎え入れるホストハウスとしても機能する場として望まれた。

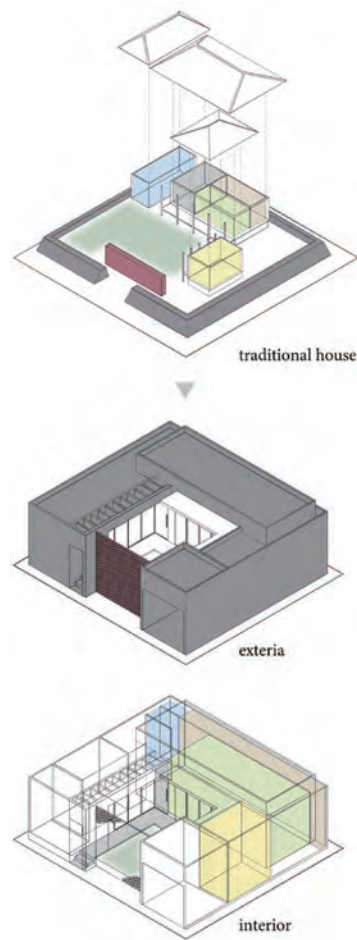
周辺には、開発途中の森が残る一方で、将来的な立地を見越した大型アパートが建ち並び、いわゆる民家の住宅地とは異なる、匿名性の高い風景が広がっていた。私たちは、この場所に覆われつつある地霊とのつながりを、いかにして住まいの中に取り戻せるかを問い続けた。

そのひとつの帰結として、中庭を中心に据えた、沖縄の伝統的な古民家の空間構成を踏襲している。右手には上座にあたる和室、左手には、アートギャラリーとしての役割をもつ廊下からつながる個室群。正面には、表座(一番座・二番座)としてのリビングを配した。

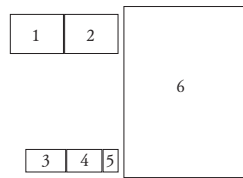
かつての沖縄では、庭や自然と深く結びついた空間で、人を迎え入れ、もてなしが行われてきた。3mの深い庇が内と外の境界を曖昧にし、中庭や表座を通して、自然と人とがゆるやかにつながる。この住まいには、沖縄ならではの、温かな迎え入れのかたちが息づいている。

沖縄はまた、石を好み、積む文化をもつ土地でもある。琉球石灰岩、戦後のブロック塀、そしてRC造へと続く素材の記憶。外装には杉板本実型枠を用い、ヒンブン壁にはレンガを積み、かつての琉球石灰岩は、もてなしのための内部空間に採用している。一方で、古民家にはなかった現代の玄関空間には、あえて石貼りをを用いず、余白の空間として白を採用した。

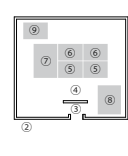
曖昧だった「何か」が失われつつある今、その存在意義を改めて問い、アイデンティティと向き合う必要がある。自然と人の営みが長い時間をかけて折り重なり、言葉にならない気配として、土地に残されてきたもの。それこそが、私たちが考える沖縄のゲニウス・ロキであり、その連なりを建築として結び直すことを大切にしている。



1. 3mの深い庇がつくる半戸外空間
2. 気配が浮かび上がるアプローチの夜景
3. 環境装置として機能するレンガスクリーン
4. もてなしを支える琉球石灰岩の空間
5. あえて石を用いない玄関の余白
6. 中庭を中心に据えた古民家構成の継承

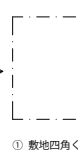


沖縄古民家



- ① 敷地四角く
- ② 外壁 / 屋敷面
- ③ ヒンブン
- ④ 前庭(ゲ)
- ⑤ 二番座
- ⑥ 裏座
- ⑦ 土間
- ⑧ 客間(アシャキ)
- ⑨ 便所(ワール)

プロジェクト



- ① 敷地四角く
- ② 外壁



- ③ ヒンブン
- ④ 前庭(ゲ)
- ⑤ 二番座
- ⑥ 裏座
- ⑦ 土間
- ⑧ 客間(アシャキ)
- ⑨ 便所(ワール)



- ① 敷地四角く
- ② 外壁
- ③ ヒンブン
- ④ 前庭(ゲ)
- ⑤ 二番座
- ⑥ 裏座
- ⑦ 土間
- ⑧ 客間(アシャキ)
- ⑨ 便所(ワール)

所在地：沖縄県南風原町
建築主：個人
構造・規模：RC造 平屋
敷地面積：507.63㎡
建築面積：301.59㎡
延床面積：253.79㎡
撮影：小玉 勝
外壁塗料：ボンフロン/
マシキ商会





沖縄社屋ビル

Office Architecture, 2019

人と自然、組織の創造性を支える場

本計画は、国際的な活動を行う企業の拠点としての沖縄社屋ビル。単なる業務拠点ではなく、沖縄という土地の環境と文化を受け止めながら、企業の思想と人の創造性を育む場として構想された。

敷地は沖縄本島中部、交通量の多い幹線道路沿いに位置している。しかしその周囲には、深いバッファゾーンとして豊かな緑が巡らされ、建物は360度、緑に包まれた恵まれた環境にある。

外部の喧騒をやわらかく遮りながら、内部には光と風、そして沖縄らしい伸びやかな風景を取り込む構成とした。

私たちは、住まいと同じように、オフィスもまた人生の中で多くの時間を過ごす「第二の居場所」だと考えている。働くスタッフ一人ひとりが、心身ともに快適であること。そして、その状態が集中力や創造性、判断力へと自然につながっていくことを大切にしたい。

すべての執務室から沖縄の景色を望める配置とし、中央にはエントランス、会議室、休憩室、レストルームといったパブリックコアを集約。その両側に東西のウイングとして個室ブースを配置することで、業務への集中と、人や情報が交差する余白とを、無理なく共存させている。日常の動線の中で、自然と来客やス

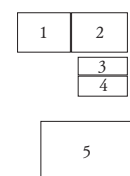


タッフ同士の交流が生まれるレイアウトである。

空調には全館空調を採用し、日本基準の約三倍にあたる換気量(ドイツ基準)を確保。クリーンで健やかな執務環境を確保した。見えない部分にこそ配慮を重ねることが、長く働き続ける場には欠かせないと考えている。

素材や空間構成、デザインは、時代の流行に左右されるものではなく、時間を経ても価値が認められ続けることを前提に選び抜かれた。この社屋は、効率だけを追求するオフィスではなく、人の思考と文化を静かに支え、育てていくための建築である。

1. バッファゾーンを望む会議空間
2. 東西のウイングをつなぐ共用空間
3. 夕景に浮かぶ建築の佇まい
4. 周辺環境の中に据えられた建築の配置
5. 内に関き、外に対して緩やかに閉じるガラスの執務空間



所在地：沖縄県うるま市
 建築主：企業
 構造・規模：RC造 地上2階
 敷地面積：2,079.74㎡
 建築面積：394.86㎡
 延床面積：770.41㎡
 撮影：矢野紀行
 施工：シンコウハウス工業



Omn house

Residential Architecture, 2016

都市の中に、沖縄の自然を取り戻す住まい

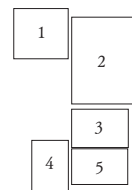
この住まいは、夫婦が20代の頃に取得された建売住宅を、30年の時間を経て建て替える計画から始まった。周囲には、レンガ調タイルの外装をもつ家々が並び、丁寧に手入れされた庭先の花々が、これまでの暮らしの歴史を静かに物語っている。以前の住まいは、約60坪の敷地に建つ22坪の平屋。日中でも照明が必要な室内環境に加え、庭と室内のつながりが薄く、周囲の建物の影に包まれる敷地条件でもあった。夫婦の願いは、これからの人生を無理なく、心地よく過ごせる住まいであった。

私たちはまず、まち並みとの関係性を整えることから設計を始めた。透かし積みレンガによるヒンブンを設け、外部と内部の間にやわらかな緩衝空間をつくった。北側斜線制限は天空率緩和規定を用いてクリアし、まちのスケールに調和する外形としている。生活の中心を1階にまとめ、将来を見据えたバリアフリーの動線としている。2階には趣味のための和室と、それぞれの書斎を設え、住まい全体を緩やかにつなぐホームエレベーターを備えた。

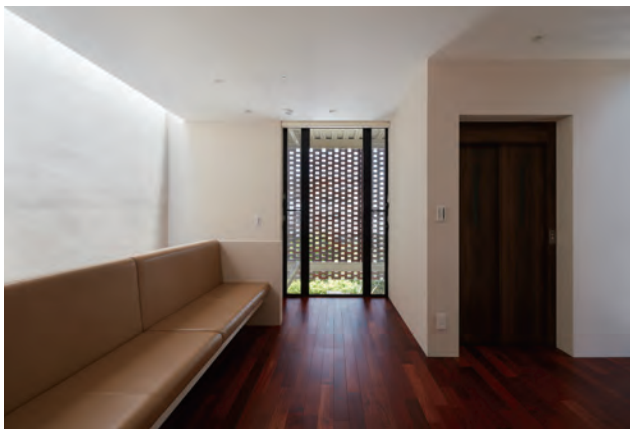
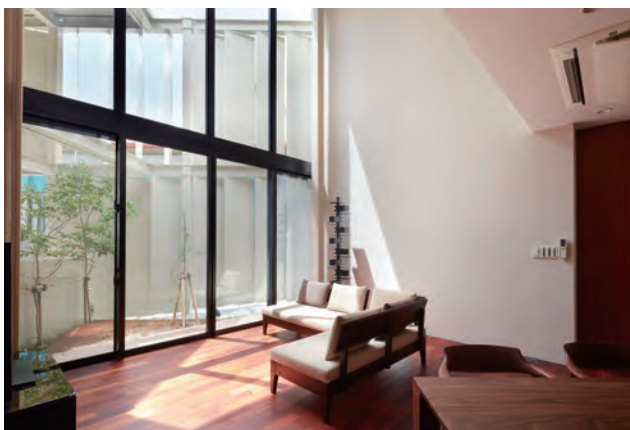
平面は、リビングを東へと振るシンプルな操作のみ。それによって、自然光や空の気配、季節ごとに表情を変える小庭の風景を、日常の中へと静かに取り込んでいる。都市の中の自然とは、空であり、光であり、風であり、雨。ジャロジー窓による通風、トップライトから落ちる光、小庭に面した大きな開口部を通して、室内のあちこちで、自然の移ろいを静かに感じ取れる空間を重ねた。

敷地条件や周辺環境という制約を受け止め、そこにしかない魅力へと読み替えること。自然とともに暮らす、沖縄本来の住まいのあり方を大切にしている。

1. まちと対応する透かしレンガの外観
2. ヒンブンがつくる、やわらかな境界
3. 光と風が通り抜けるリビング
4. ヒンブンを望む玄関の余白
5. ヒンブんに開くエレベーターホール



所在地：沖縄県浦添市
 建築主：個人
 構造・規模：RC造 地上2階
 敷地面積：100.68㎡
 建築面積：158.89㎡
 延床面積：158.89㎡
 撮影：矢野紀行
 施工：沖秀建設
 鉄骨工事：ミサキ工業
 レンガ：都窯業
 外壁・鉄骨塗料：ボンブロン/マシキ商会





Hrf house

Residential Architecture, 2014

蒸暑地域における、新しい住まいの試み

この住まいは、ハウズビルドを生業とし、東南アジアの蒸暑地域における住宅に造詣が深い、イギリス生まれ・オーストラリア育ちのオーナーが建てた、二件目の自邸である。計画地は沖縄本島中部。まちの機能と、どこか懐かしい田舎の穏やかさが同居する土地にあり、南は道路に接し、北は崖地。眼下には、深い緑に包まれた比謝川の景勝が広がっている。

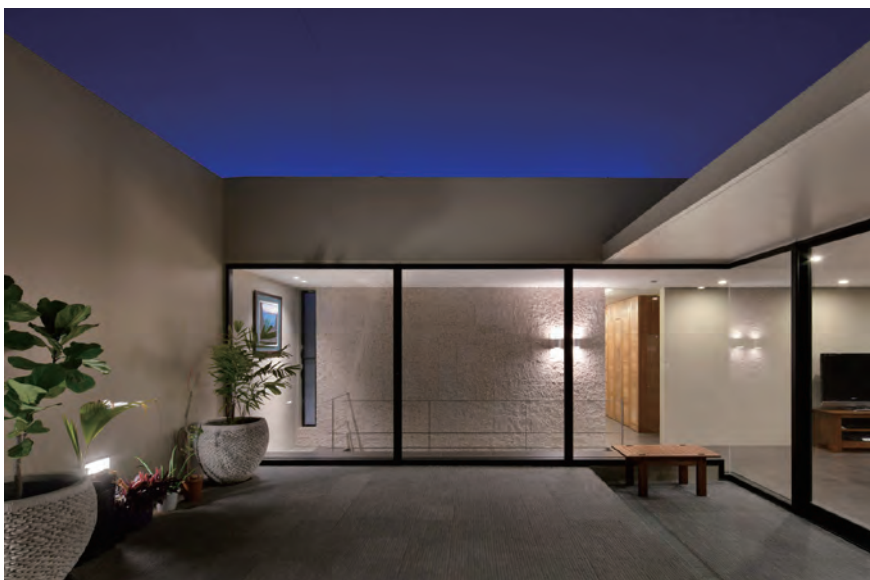
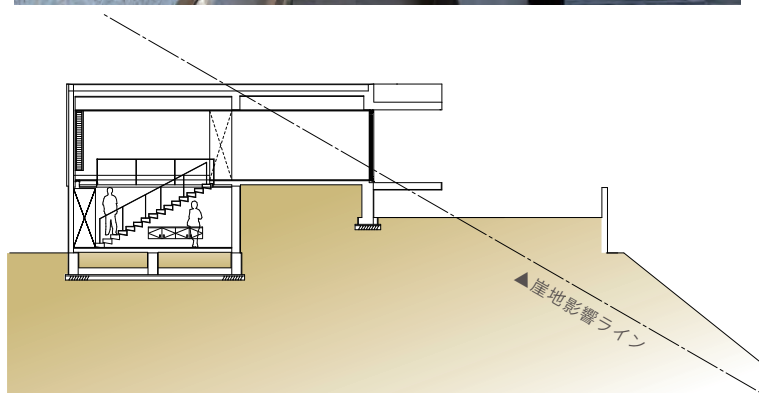
私たちはまず、堅固な地盤と高低差、その土地がもつ時間の重なりを丁寧に読み解いた。

ガレージと玄関を道路ラインで半階分掘り込み、その上に平屋を静かに載せる構成とすることで、風景に対して過度に主張することなく、土地に身を委ねる建築のあり方を志向した。

崖地に影響を与えないよう展望テラスは片持ちで張り出し、風を導くための光庭は道路からの視線を遮りつつ東南に開いている。それらはすべて、景色や気候を制御するためではなく、土地や自然を素直に受け止め、ともに暮らすための余白や装置として配置されている。深い庇、南からの通風、屋根裏に設けた断熱材と空気層。地熱を感じるタイルの床、そして涼や自然とのつながりをもたらすプール。沖縄コンクリート住宅の知恵と、東南アジアの蒸暑地域で培われたオーナーの経験を重ね合わせた。

床や壁に用いたタイルや石、オールドチークの建具や家具は、オーナーとともにバリエーションを選び抜いたもの。交易によって文化を育んできた沖縄の歴史にならい、外からの知恵や素材を取り込みこの風土に根ざす暮らしのかたちへと、静かに昇華させている。

沖縄という土地の記憶に耳を澄ませながら、蒸暑地域における、ひとつの住まいのあり方を探求した。



1. 風景に開かれた半戸外空間
2. 光と風を導く光庭
3. 地形に寄り添う静かな外観
4. 内と外が溶け合う夜の光庭



所在地：沖縄県嘉手納町
 建築主：個人
 構造・規模：RC造 地上2階
 敷地面積：401.60㎡
 建築面積：185.28㎡
 延床面積：189.00㎡
 撮影：矢野紀行
 施工：池原建設